7月20日／高校生／八神るいの相談

茶倉くんと烏丸くん、だよね。二年三組の八神るいです。今いい？　話があるの。
クラスの子に聞いた、茶倉くんのおばあちゃん地元で有名な拝み屋さんなんでしょ。茶倉くんも霊感持ちで、色んな事件解決してきたらしいじゃん。
オカルト絡みの相談受けてくれるってホント？
お金……は、前払い？　手持ち三千円しか。コロッケパンと焼きそばパン貢ぐから、これで勘弁してくれる？
あとでお年玉払うから。
とりあえず場所変えよ。ここじゃ人に聞かれるし屋上へ。
烏丸くんも焼きそばパン推し？　すぐ売り切れちゃうから、ゲットできたの奇跡だった。
それで、ね。二人にお願いしたいのは、うちのおばあちゃんのことなの。
おばあちゃん、認知症なんだ。で、お母さんがずっと介護してた。お父さんは単身赴任で頼りになんない。
ヘルパーさんにも来てもらってるけど、ずっといてくれるわけじゃないし、オムツ替えとかご飯とかお母さんが殆ど一人でやってたの。
優しくていいおばあちゃんだった。お小遣いいっぱいくれて可愛がってくれた。大好きだった。おかしくなり始めたのは五年前。だんだん物忘れが酷くなって、朝ごはん食べたのに食べてないって言い張って、ご近所をぐるぐる徘徊するようになった。
嫁姑仲は良かった方。喧嘩してるの見たことないし。
お母さんはパートと介護を掛け持ちしながら頑張った。おばあちゃんはどんどんボケてった。私は……何もし

なかった。小学校の頃からバスケに打ち込んでて、朝練ハードで、高校じゃレギュラー目指して……なんて、言い訳にもなんないよね。

夜、トイレに起きると、台所から啜り泣きが聞こえてくるの。なんだろうって思って覗いたら、お母さんが泣いてるの。

一回じゃない。何回もあった。「どうしたの？　だいじょぶ？」って聞いても「だいじょうぶ。なんでもない」って笑うだけで……なんでもないはずないよね。

だけど私、知らんぷりした。うちの問題に深入りするのが嫌で、おばあちゃんの介護、お母さん一人に押し付けた。

そのうち、ね、おかしくなった。

おばあちゃんはヒステリー起こして、「あんたは誰」ってお母さんを罵る。私をお姉さんと間違えて構ってほしがる。

優しかったおばあちゃんが変わってくのが嫌で逃げ続けたずるい私と対照的に、お母さんは始終イライラし、おばちゃんに向かって声を荒げることが増えてった。

前はしっかりしてる時としてない時が半々だったのに、最近じゃ三対七位。

私のことお姉さんと間違えるだけじゃなくて、お隣の小学生を疎開で離れ離れになった友達と思い込んで、玄関に上がりこんじゃったり。

おばあちゃんが使用済みオムツを撒き散らした日、遂にお母さんは泣き崩れた。

「これじゃ赤ちゃんと一緒じゃない！　まるっきり子供返りして、情けない！」

……食べてる最中に汚い話ごめん。

でもね、これだけはわかってほしい。お母さんは悪くない。おばあちゃんが冷蔵庫のモノ勝手に食べた時も、お財布盗んだ犯人て決め付けられた時も、ずっと我慢してきたんだもん。
介護で大変なのに毎朝毎朝早起きして、お弁当作ってくれるのがどれだけ有難いか。
―だね。茶倉くんの言うとおり。もう高校生なんだし、自分で作るって言えばよかった。
おばあちゃんが認知症になってからうちはめちゃくちゃ。年のせいだ、病気のせいだ、おばあちゃんは悪くないって頭じゃわかっててもうざがる気持ちが止まんなくて、おばあちゃんさえいなければって神様に願った。
消えちゃえって。
叶った。

お母さんがキレた次の日、おばあちゃんはいなくなった。
もちろん警察に通報した。でも行先はわかんない。ご近所さんも知らないっていうしお手上げ。
お母さん、がっくり落ち込んじゃって。自分のせいだ、あんなこと言わなけりゃよかったって。
もしおばあちゃんに何かあったらどうしよ。事故や事件に巻き込まれたら……。
待って、行かないで、最後まで聞いて！　この話を茶倉くんにしてるのはちゃんとわけがあるの。
一昨日でおばあちゃんが消えて一週間。なんとなく眠れなくて、夜遅くまでスマホをいじってたら、ユーチューブに動画が上がってたの。たまに見てるユーチューバーの新作。
場所を聞いてびっくり、私が住んでる町にある廃トンネル。ユーチューバーの前説によると、戦争中に疎開児童を乗せた列車が機銃掃射をうけて大勢死んだ、曰く付きのトンネルなんだって。

そのチャンネルは全国の心霊スポットに突撃すんのをウリにしていて、メジャーどころに行き尽くした結果、コメ欄で口コミ募ってマイナーな場所選んだみたい。
「ここが噂の冥界トンネルです。視聴者さん曰くあの世に繋がってる場所、死んだ人に会えるらしいぜ」
「うわ～雰囲気あるな～」
「この暗さ！　肌寒さ！　知名度じゃ犬鳴トンネルや吹上トンネルに劣っけど、圧を感じるよね～」
「げっ、壁に弾痕」
「生々しいな……」
二人組のユーチューバーがトンネル内を映す。出口は遥か彼方。
「え？」
私、見た。
ユーチューバーの肩越しにチラ付く影。見覚えあるパジャマの柄。トンネルの奥へとぼとぼ歩いてくその人は……。
「おばあちゃん？」
他の人にも見えたみたいで、コメ欄は騒然。やらせを疑うひともいた。本人たちは否定してた。
アレはおばちゃんだった。生まれた時から同居してる孫が言うんだもん、間違いない。
もしかしてって動画の撮った日付を確めたら、おばあちゃんが消えた翌日だった。
私、じっとしてらんなくて、昨日は生まれて初めて学校サボった。行き先は冥界トンネル。
動画がアップされた直後だし、冷やかし目当ての人がたくさんきてるかなって警戒したけど、午前中に着いたせいか全然そんなことなくて、トンネルだけがぽっかり口を開けてた。
自転車を草むらに転がして、入口近くまで歩いてって、叫んだ。

「そこにいるのおばあちゃん。むかえにきたよ、るいだよ。一緒に帰ろ」
反応なし。しーんと静まり返ってる。
「お父さんお母さんも心配してる。みんなさがしてる」
嫌な感じ、だった。誰もいないのに視線を感じる、トンネルの中に犇めいてるのがわかる。
どうしても入る勇気が湧かず、だけど引き下がれなくて、何度もおばあちゃんを呼んだ。
でも、やっぱり出てきてくれない。仕方ない。ぐっと奥歯を噛んで、覚悟を決めて駆け込んだ。
「このあたり……だよね」
ユーチューバーの立ち位置を思い返し、注意深く進む。長さは百メートル位。向こうにはポツンと丸い明かりがあって、それを目印にさらに進み、不意に立ち止まる。
音が聞こえた。ババババ、ババババ。うるさい。鼓膜が破ける。
耳を塞いでしゃがんだ瞬間―
ガタンゴトン、ガタンゴトン。
後ろから何かすごい質量のものが近付いてきた。ババババ、ガタンゴトン、ババババ、ガタンゴトン、その繰り返し。
ガタンゴトンをババがかき消す間際に振り向いて、背後に迫ったそれが巨大な列車と知った。
今の電車と違うの、昔の列車。先頭車両が蒸気を噴いて、後続車両は激しく揺れて、窓には夥しい手形と顔が、知らない人たちが張り付いてた。

その中に、おばあちゃんがいた。

嘘じゃない。信じて。絶対見た。

……それからどうした？　壁に張り付いて、ぎゅって目ェ瞑って、列車をやり過ごしたよ。

次に目を開けたら何もなし。列車はどっか行っちゃった、おばあちゃん閉じ込めたまんま。

お願い茶倉くん、おばあちゃんを連れ戻して。

おばあちゃんは幽霊列車にさらわれちゃったの。アレは列車の亡霊なの。

お母さんは毎日自分を責めてる。お父さんは単身赴任を切り上げてうちにいる。

おばあちゃんを連れ戻してくれたらお年玉全部あげる。烏丸くんと山分けして。

悪いけど、私、一緒に行けない。見て、足が震えてる。もうすこしで轢かれるとこだったんだよ。

身勝手だよね、わかってる。わかった上でお願いします。茶倉くんたちだけが頼りなの。

8月1日／無職／守屋耕作の証言

むさ苦しい場所ですまんね、適当に座んな。今お茶を……お構いなく？　子供が遠慮しなさんな、俺がもてなしたいんだよ。手がぷるぷるしてる？　代わりにやってくれるのかい、優しいねえ。名前は？　リーチ？　なるほどね、道理を一番に重んじると書くのか。いい名だ。そっちの賢そうな子は……板尾くんかい、覚えたよ。おっとそうだ、戸棚にかりんとうが入ってた。賞味期限は切れてねえはずだから食いな食いな、育ち盛りだろい。

しかしまあ、備忘録代わりのブログを見れくれる子がいたとはなあ。老いぼれの手習いにしちゃよく書けてんだろ？　指先動かすなあボケ防止に効くって、娘に勧められたのが始めたきっかけ。

連絡もらっておったまげたよ、班の課題で例のトンネルのこと調べてんだって？

幸いオツムはハッキリしてる。今日の晩飯を食べたかどうかは怪しくても、昔の事ならよく思い出せる。

あのトンネル……正式名称は冥賀（みょうが）トンネルっていうんだ。

甘酢漬けにするとうめえって、そっちのみょうがじゃねえよ。今昔物語にもでてくる古い言葉で、めいめいのうちに受ける仏の加護や知らないうちに受ける神の恵みをさし、偶然の幸いや利益を神仏の賜うものとして感謝する言葉らしい。

トンネルができる前は何もねえ、殺風景な雑木林だったって聞いた。忌み地？　さあて、墓地だの処刑場だのじゃなさそうだが。あえて近えの挙げんなら八幡の藪知らずかね、千葉の市川にある禁足地の通称だよ、首塚で有名な平将門とも縁が深いって話だが。神隠し……たしかそんなようなことあったって、親父に聞いたっけ。

お前さんたちは教科書でしか知らねえか。

当時は戦争真っ只中、産めよ増やせよの時代。俺は八人兄弟の下から二番目で、二歳離れた妹がいた。

親父や上の兄貴は兵隊にとられちまって、お袋や姉ちゃんたちは婦人会の活動や工場労働で忙しかったから、アイツの子守りは俺の仕事だったのさ。

妹はふみっていった。おかっぱ頭にどんぐりまなこ、モンペを穿いたちびすけ。

姉ちゃんのお下がりの文化人形をどこ行くにも持って歩いた、どうしようもねえ甘えん坊。

口達者なマセガキでねえ、よく喧嘩したよ。怒られんのは決まって俺。お兄ちゃんなんだから我慢しなさいってのが親の決まり文句。そのくせ大の怖がりで、夜に小便したくなりゃ、隣に寝てる俺を揺り起こす。苦手なもんは暗闇と空襲警報。けたたましいサイレンが鳴るたび、赤い防災頭巾をかぶって防空壕に転がり込んだ。

文化人形ってのはむかし流行った、目がぱっちりした女の子の人形さ。うちは典型的な貧乏人の子沢山で、おもちゃなんてめったに買ってもらえなかったから、兄貴や姉ちゃんのお下がりで我慢したんだ。

思い出すなあ、近所の空き地にふみを連れ出して竹とんぼで遊んだ日。ふみと仲良しの子もいたっけ。

こうやって飛ばすんだよ、って両てのひらを擦り付けるように回したら、空の彼方にバーッて上がって。二人ともぽかんと口開けて見てたっけ。

ふみの人形は二番目の姉ちゃんにもらったもんで、我が子みてえに抱っこしておんぶして、肌身離さずお世話してたよ。

ちょっかいかけると火が付いたみてえに怒って、「さわっちゃだめ！」って怒鳴る。

昭和二十年初夏、戦争が終わりに近付いた頃。俺とふみは田舎に疎開が決まった。
お袋の故郷にあたる青森の伯父夫婦が、うちに来いって誘ってくれたんだ。
伯父さんちは農家で食い物がある。スイカも育ててるっていうんで、俺とふみは舞い上がった。
ところがな、前日に腹を壊して、俺だけ別の列車に乗ることになった。
お袋は末っ子だけ行かせるのを渋ったが、ふみがだいじょうぶって言い張るもんで、しぶしぶ許しちまった。
死ぬまで後悔する羽目になるたあ露知らず。
当日。俺は布団の中で寝込んでて、見送りにいけなかった。向こうの駅にゃ伯父夫婦が迎えにくる段取りだった。
ふみはお気に入りの人形を抱っこし、新宿発青森行きの杯列車に飛び乗り……二度と帰っちゃこなかった。疎開児童を乗せた満員列車を、米軍の戦闘機が襲ったのさ。
トンネルに入るや挟み撃ちにされたのが運の尽き。前と後ろ、両方から機銃掃射をくらっちゃたまんねえ。
真っ先に操縦手がやられたのか、出るなり列車は横転し、追い討ちの散弾が蒔かれた。

犠牲者は五十人以上。百人以上が死傷した大惨事。
狙われた理由？　富士演習場に行く兵隊さんが二等車および貨物車に乗ってたから、ってのが有力な説だな。
けどよ、全体から見りゃほんの一割だ。他は無関係の一般人、とんだとばっちりさ。

ふみの最期はよく知らねえ。犠牲者の遺体は近くの寺で荼毘に付されて、戻ってきたときゃ骨だけになってた。
お袋や姉ちゃんは泣き通し。

戦争が終わってからトンネルを見に行った。壁には蜂の巣みてえに弾痕が散らばってた。地面にめりこんでるのもあった。
トンネルん中は真っ暗で音が響く。戦闘機の爆音とうるさい銃声、乗客の悲鳴が膨らむ。

どんだけ怖かったか。
どんだけ痛かったか。

あの甘えたなふみが体中穴だらけになって、ひとりぼっちで死んじまったのがやるせなくて、しばらく泣いた。
一緒に付いてってやりゃよかった。
俺が隣の席に座ってたら、上におっかぶさりゃアイツだけでも助かったんじゃねえかって、考えるのをやめらんなかった。
せめて即死なら……苦しまず逝けたんなら、それが救いか。
戦争が終わった時にゃ八人が三人に減っちまった。生き残った姉ちゃんたちも年の順に逝って、ぴんぴんしてんのは俺だけ。あの日腹を下したおかげで一番長生きしちまったよ、憎まれっ子世に憚るってなあ本当だな、ははは。
……あれから……お袋の目がな、言ってるんだよ。なんでふみが。お前が死ねばよかったのにって。
考えすぎ？　そうだな、単なる被害妄想かもな。
ふみは遅くにできた娘で、生意気な倅と違って、誰からも可愛がられてた。
勘違いすんな、家族は一言も責めなかった。だから……恨んでるかなんて、死ぬまで聞けずじまいだったよ。

すまねえ、しんきくせえ話になっちまった。
……俺はなあ、「気を付けてな」ってふみに言えなかった。どうせ青森で落ち合うんだって高括って。
そもそも腹を壊した理由ってのが笑止千万で、お地蔵さんの供えもんのまんじゅうを盗み食いしたんだ。それに当たった。
食糧難で配給頼りの時代、甘えもんなんて贅沢品よ。罰当たりな振る舞いだってわかっちゃいたが、空腹にゃ勝てなかった。
あとでこっそりふみに話したら、「ばっかだあ」って笑い転げやがって。こっちもカチンときて、「お袋に告げ口したら承知しねえぞ」って、拳固を振り上げ脅し付けた。
アレが最後の別れ。
ふみは俺に会わず、お袋と手え繋いで駅まで送られてった。
なんだってツマんねえ意地張っちまったんだかなあ。たった一人の妹が疎開に行く朝に、頭っから布団をかぶって、狸寝入りを決め込んで。
白状するとな、後ろめたくて気まずかった。盗み食いで腹下した上妹に笑われるなんざ、兄貴の面目丸潰れだ。
今でも考える。
悔やんでる。
俺一人が欲張らず、ふみの分も持って帰ってやってたら、二人仲良く腹あ壊して、列車に乗らずすんだんじゃねえかって。
……以上が冥賀トンネル列車襲撃事件の遺族が語る全容だ。ご満足いただけたかい？
お前さんたち、あのトンネルに行くのかい？　そうか……勝手な頼みだが、俺のぶんまでよく拝んできてくん

な。車椅子じゃ遠出もできねえ。
ふみはな、文化人形を赤ん坊に見立てて、ままごとすんのが好きだったんだ。名前も付けてたんだぜ。
もし生きてたら……どんな大人になってたろうな。

8月3日／大学生／野崎更紗の証言

メールくれたのアンタたち？　へえ、思ったよか可愛いじゃん。ここおごり？　だよね。すいませーん、ポテトとダブルチーズバーガーとコーラレギュラーサイズで。

ていうか物好きだよね、パリピの肝試しの話聞きたいなんて。いきなりＤＭもらってびびった～。

オカルト興味あんの？　……ふーん。マイナーな心霊スポットだし、ＳＮＳに写真アップしても、殆ど反応なかったんだけどな。

正直あんま話したくないんだよね。アタシのアカ見てたら知ってるでしょ、その後の顛末。いや、呪いとか本気で信じてるわけじゃないんだけど……まあいいや、おごってもらったお礼に話すよ。

例のトンネルの話が出たのは一年前、サークル棟でだべってた時。同じ学部の葉月が、スマホで心霊スポット調べてたの。

葉月は自称霊感少女で怖い話が大好き。性格は強火のメンヘラ入ってて、ぶっちゃけ面倒くさい子だったけど、サークルの連中とはまあまあ上手くやってたよ。これ、あの子のアカウント。更新止まっちゃってるけど。

葉月のスマホ覗き込んだら、見たことあるトンネルが写っててびっくり。

「ここ地元だよ」ってうっかり口滑らしたら、「えーすごーい！」「マジ？」って、みんな盛り上がっちゃって。

冥賀トンネル？　そんな名前なんだ。うちらは別の呼び方してた、冥界トンネルって。

あー、空襲の話は聞いた。学校の先生が言ってた。ヒサンだよね、子供もいっぱい乗ってたんでしょ？

そんな事故があったせいか、あの世と繋がってるって噂がどこからともなく流れ出したの。冥界に行けるから冥界トンネル、安直っしょ？
同小同中の男子が肝試しに行ったって自慢してた。
壁に埋まった弾丸掘り出した、中で白っぽい人影見た、足音が追っかけてきたとか夏休み明けの教室で自慢する馬鹿もいた。
女子は冷めた目で眺めてたよ、ばっかじゃないの、幽霊なんているわけないでしょって。アタシもそっち派。ま、ホントはびびってたんだけどね。こー見えて怖がりなの、ホラーとかだめだめ。
男子もおばけとか信じてなくて、度胸試しに行ったんじゃないかな？
まーね、アタシも悪い。反省してる。俄かに地元が注目されたもんで、「連れてったげよっか」なんてノリで言っちゃった。
したらみんな行く行く言い出して、ちょうど免許取り立てだったし、彼氏の車借りて出発したわけ。
大学生なんてクソ暇な生きもんだし、心霊スポットへのドライブは手頃なイベントっしょ。
メンバーは同じサークルの男女五人、当然葉月もいた。助手席には彼氏の雄大が座った。「親父の車にキズ付けんな」ってうるせーのなんのって。
季節は六月下旬の蒸し暑い日、地雷メイクにゴスロリの葉月以外は半袖だった。サークルの連中は葉月の奇行に慣れっこで、別段突っ込まない。雄大は「日焼け止め塗る手間省けたじゃん」とかいじり倒してた。無神経なのよ。
トンネルまでは片道一時間ちょい、その間は夏休みの計画を色々くっちゃべってた。アタシと雄大は二泊三日のバリ島旅行に行く予定で、仲間にひやかされた。

冥界トンネルに到着後、入口の前に車を止めた。あたりは殺風景な草っぱら。地面に敷かれたレールも経年劣化で雑草に埋もれて、よーく見なきゃ線路の跡だってわかんない位だった。

一歩踏み込んだ瞬間、あ、やばって思った。空気がね、変わったの。黴臭いっていうか……腕にプツプツ鳥肌浮いた。雄大はあちこちスマホで撮ってはしゃいでた。

今考えるとサイテーだよね、大勢の人が死んだ場所なのに。うん、だからさ、バチ当たったんだ。自業自得。

男子の一人が入口近くの壁を見て、「うおっ」と声上げた。なんだなんだと群がって、機銃掃射のあとにドン引き。

「更紗の話ホントだったんだ」

「当たり前でしょ、疑ってたの」

「記念に弾丸持って帰ろうぜ」

「は？　よしなよ」

「なんで」

「ジョーシキ的に考えてフキンシンでしょ、ありえない」

「今さらいい子ぶんな、付いてきたくせに」

「バズりたくねえの？」

男子と女子とで意見が割れた。男子は面白がってたけど女子は否定派、呪われるよって必死に止めた。特に葉月は真っ青。

なのに雄大は聞いてくんなくて、アタシたちが反対すればするほど悪ノリしくさって、尻ポケットから出した鍵の先端で、弾痕をほじくりはじめたの。

ガリガリ、ガリガリ、ガリガリ……暗闇の中、雄大が壁を引っ掻く音だけが響く。それが次第に大きくなって、周囲の温度もどんどん下がってく。

最初のうちは囃し立てた男連中も口数少なくなって、憑かれたように弾痕を削る雄大を、遠巻きにし始めた。

「もうやめよ」

「早く出ようぜ、日暮れ前に帰りてえし」

「ここ空気重い」

「いい加減にしてよ、聞こえてるんでしょ雄大！」

最後の方は叫んでた。怖くて怖くて頭がどうかしちゃいそうだった。ガリガリガリガリガリガリ……雄大は止めてくんない。鍵の先端で弾痕をほじくって、死に物狂いに弾丸を抉りだそうとしてるわけ。

目の焦点は合ってなくて、ていうかどこも見てなくて、それで、あのね、それが起きた。

「あっ！」

ずるっと手が滑った拍子に、鍵が雄大の指の爪を剥いだ。

爪、やっちゃった事あるならわかるよね？　すげー痛いの。なのに雄大は無表情のまま、生爪剥がれても意に介さず、ガリガリ、ガリガリやってんの。

映画とか見てるとさ、大抵誰かが合図するじゃん。「逃げろ！」って。現実は違ってて、誰も叫んだりしなくて、それはきっと叫んだりしたらバレちゃうからで、次の瞬間猛ダッシュで入口まで引き返した。雄大もちゃんと回収したよ。

車を出した後は無言だった。助手席に押し込められた雄大はイミフな事ブツブツ言ってるし、マジで泣きたかった。

「ねえ葉月、アレなんなの？　雄大どうしちゃったの」
ハンドルを握りながら聞けば、後部シートの葉月は俯いて、ポツンと言った。
「……中にいた。ざわざわしてた」
雄大の方は大丈夫だった。
次の日になったらケロッとして、トンネルの出来事聞いてもな～んも覚えてないって。ホッとしたよ。ほら、ヤバかったらお祓いとか頼まなきゃいけないし？　バイト代で足りっかな、折半しよっか、なんて帰りの車ん中で相談してたもん。心配損だよね。
あーよかった、これで一安心……とはならなかった。
翌月、葉月が消えた。
それが最後の投稿。遺書みたいでしょ。
でね……肝試しの参加メンバーは、葉月があのトンネルに行ったんじゃって思ったわけ。
根拠？　車ん中の様子。冥界トンネルを後にした車ん中で、葉月、バックミラーをじっと見詰めてた。ミラーにはトンネルの入口のそのまた奥、真っ暗な闇だけが映ってた。
それにね、見ちゃったの。葉月の口元、唇の動き。何呟いてんだろってミラー越しに目ェ凝らして、それ、聞いちゃったの。
「ババババババ、ババババババ」

簾のように垂れた前髪の奥、出口のないトンネルみたいに虚ろな瞳、放心状態で唇を鳴らし続ける葉月。
わけわかんない。ぞっとした。コイツにもなんか憑いてんの？
葉月の事は心配だけど、アタシたちにはどうにもできない。トンネルに戻ったって証拠もないし……一応警察にも言ったんだけど、やっぱりっていうか、全然取り合ってくんなかった。
……ナゲットくれんの？　アリガト、優しいね君。
この話には後日談があってさ。先週ね、雄大とデートしたの。そん時見た映画はハリウッドの戦争もので、アタシ、アタシね、途中から映画どころじゃなくなっちゃった。
ババババババ、ババババババって、葉月が口まねしてたのが何かわかっちゃったの。
米軍の戦闘機、P―51マスタング。

8月5日／冥賀トンネル前

諸行無常に生き急ぐ蝉の声降りしきる八月五日午前、俺達は冥界トンネル前に集合した。
「うへー、自転車こいだら汗びっちょり」
一番乗りは俺、二番乗りはズボンを腰穿きにした茶髪ピアスのチャラ男。
「先越された～」
「おっす、終業式ぶり。しばらく会わねーあいだにチャラさに磨きがかかったな」
「すげー荷物。マジでテント張んの？」
「寝袋も持ってきたぜ。そっちは？」
「貯蓄は満タン」
両腕のビニール袋を得意げに揺らす板尾。俺は草っぱらにマウンテンバイクを止め、きょろきょろあたりを見回す。
「茶倉は？」
「まだきてねーみたい」
「重役出勤だな、アイツが十時集合って言ったのに」
「先に下見しとく？」
「待て」
逸る板尾を制し、トンネルの周囲をよく観察。

冥界トンネル改め冥賀トンネルは廃墟と化して久しい。周りには夏草が生い茂り、虫の声が響いていた。ひび割れた枕木と錆びた鉄枠のレールは、隧道の奥へ消えている。

「近くで見ると迫力あるな」

ごくりと生唾飲む俺の横で、板尾が興味津々スマホをいじりだす。

「心霊スポット、冥賀トンネルで検索しても殆どヒットしねえな。知る人ぞ知る穴場ってか」

「冥界トンネルは？」

「倍ヒット」

板尾の手元を覗き込む。スマホの小窓にはおどろおどろしい黒背景に赤文字タイトルでホームページが表示されていた。

全国各地の心霊スポットを地域別に網羅したサイトらしく、我らが冥界トンネルは関東に振り分けられていた。どこの誰だか知らないが物好きな管理人もいるもんだと感心する。

「やっぱそっちの呼び名のがメジャーか。どんな心霊現象が報告されてんの」

「白っぽい人影を見る。機銃掃射の音がする。幽霊列車が通り抜ける」

「八神の証言通りか」

「学年一の美脚の八神な」

「知ってんの？」

「女子バスケ部のエース、校内じゃ割と有名人。今夏の大会じゃレギュラー入り果たしたって噂」

「めでてえ」

呑気に駄弁りながら草をかき分け、キャンプに適した場所を見繕い、どっこいせとリュックを下ろす。太陽の

光を弾く、板尾の耳たぶに目が行く。
「ピアス増えた？」
「わかる？　三個目」
「色気付いちゃってこんちきしょー。夏の予定ねえの？」
「随分なご挨拶だなオイ、二人じゃ色々大変そうだから付き合ってやってんのに」
「嘘嘘ジョーダン、頼りにしてるって」
両手を合わせ拝むふりをすりゃ、少し離れた道路を誰かが歩いてきた。
「よ。全然日焼けしてねえのな」
片手を挙げて迎える板尾を一瞥、茶倉が上品に眉をひそめる。
「なんでおんねん」
あんまりにもあんまりな第一声に、板尾が心外そうにスマホを突き付ける。
「ライン！　グループ！　待ち合わせ時間指定したろ⁉」
「三人でキャンプするって親丸め込んだの忘れた？　お前んちに泊まる事にしてもよかったけど、うちのバカ息子が世話んなったって後で電話行ったらやべえし」
「でもって辻褄合わせ要員が召喚されたわけ。うちの親はハワイ旅行中」
板尾が爽やかなキメ顔で自分を指す。威張る場面か？
「二人でこそこそ水くせーじゃん、俺だけのけ者にしようったってそうはいかねえぞ」
「さびしんぼか」
「俺たちトリオだろ。人呼んで大乱闘オカルトブラザーズ」

「お前みたいに頭悪いのが血縁とか絶望して養子縁組するわ」
「ただでさえクラス別でハブられがちなんだ、夏休み位遊んでくんなまし」
「そーそー、仲間は多い方が楽しいじゃん」
笑顔で真ん中に割り込み、板尾・茶倉と肩を組む。茶倉は憮然としたまま、板尾は対照的に上機嫌。
今回の相談者は篠塚高校二年三組八神るい。依頼をうけたのは夏休みを目前に控えた七月下旬、八神の祖母が蒸発したのはさらにその前に遡る。
「しっかし信じらんねー、幽霊列車に轢き殺されかけたとか突拍子もなさすぎ」
「もっとアンビリバボーな体験しとるやんジブン」
板尾のぼやきに呆れたツッコミを入れる茶倉。俺はスマホをタップし動画を早送り。
「八神が送ってきた動画。十分二秒で止める」
一時停止した動画を茶倉と板尾が覗き込む。撮影中のユーチューバーの背景には、トンネルの奥へと歩いてく、小柄な老婆が映っていた。着てるのは白地に花柄のパジャマ。
「な、ばっちり映りこんでるだろ」
「ホントに八神のばあちゃんで間違いねえの？」
「本人が断言してる」
夏休み突入後も八神とは連絡をとっていたが、祖母はまだ見付かってないそうだ。家で待機する両親の心労は募り、八神もかなりへこんでいた。
「焼きそばパンの恩義があっから力になってやりてえけど……」
「やっすい男」

「るっせ」
憎まれ口に悪態を叩き返し、今後の方針を検討する。
「まずはこれまでの経緯をおさらい、図書館で調べたら冥賀トンネル列車襲撃事件の詳細が古新聞と郷土史に載ってたぜ。概ね守屋のじいちゃんの言うとおり、発生日は昭和二十年八月六日の午前九時ごろ。新宿発青森行きの列車が米軍の戦闘機、P－51マスタングに襲われた」
「えっぐいな、前と後ろ両方から挟み撃ちかよ」
「トンネル入ってさあこれで大丈夫、って安心した矢先に、出口で待ち伏せてたヤツがバババ」
死屍累々に阿鼻叫喚の惨状を想像し、思わず顔を顰めちまった。
八神の依頼をうけてから二週間弱、手分けして情報収集に励んだ。その過程で接触したのが守屋のじいちゃんと更紗さん。
守屋のじいちゃんに対面した際偽名を使ったのは身バレを防ぐため。忘れちゃいけねえ、茶倉んちは地元じゃ有名な拝み屋にして市長と懇意な名家なのだ。
遺族から話を聞くのに拝み屋の孫がしゃしゃりでちゃ反発招くと踏んで板尾の名前を借りたものの、騙したみたいで心が痛え。
「守屋のじいちゃんは冥賀トンネルで妹に死なれ、更紗さんの友達は失踪してる」
「八神のばあちゃんと関係あんの？」
「わかんねーけど……茶倉～なんか感じる？」
茶倉はトンネルの入り口を真っ直ぐ見詰め、目を細めたり開いたりしていた。霊視を行ってるのだ。
「ざわざわしとる」

「抽象的。わかりやすく言うと」
「神隠しがようおきる、ってのは嘘ちゃうな」
「八幡の藪知らずだっけ。アレと同じ？」
「近いな」
敢えて断言を避け、曖昧な表現に終始する。コイツは慎重派なのだ、確信持てたこと以外はなるべくぼかす。
「とりあえずテント張るか。入口のそばで見張ってりゃ異変に勘付く」
「楽しんどるやろお前」
「茶倉は？　泊まりオーケー？」
「ババアは四国。帰りは明日」
「よっしゃ」
俺達の目的は八神のばあちゃんを連れ帰ること。幽霊列車との遭遇に備え、草むらん中に基地を作る。
「そっち持て板尾」
「ラジャー」
「関西人もサボってねえで手伝え」
「めんどくさ」
「働かざる者食うべからず」
「まさか飯盒持参できたんか」
「当たり。ボイルで三分のレトルトカレーもあるぜ」
「完璧キャンプやん」

「林間学校思い出すなあ」
テントを設営、中に転がり込んではしゃぐ。ピラミッド型の天井にテンション上がる。
「川の字じゃ窮屈か」
「交代で寝ずの番な」
「トランプ持ってきた？」
「もちろん」
「ババ抜きやろうぜ」
「ポーカーにしねえ？　そっちなら負ける気しねえ」
「え～ルール知んねえし」
「簡単だよ、教えてやる」
「多数決できめようぜ、茶倉はどっちがいい？」
心霊スポットでキャンプってのもちょい不謹慎な気がするが、この際依頼の延長と割り切り堪能する。ただ一人茶倉だけが白けていた。
「アホくさ」
「青春ぽくてたのしーじゃん」
「そうだそうだ、俺たち青春アミーゴトリオだろ」
入口の帳を上げて茶化す板尾に便乗、カードを捌きながら口添えする。茶倉は腕にとまった蚊を叩き殺すのを仕損じ、憎たらしげに舌打ちしていた。
「虫多いなここ」

「スプレーあるぜ」
「貸せ」
俺が投げたスプレー缶をキャッチ、生っ白い腕やら足やらに神経質に吹き付ける。
「女子か」
思わず漏らしたツッコミに板尾もげんなり。前途多難。

「ちくしょーまた負けた！」
最下位の板尾がカードをばら撒いて突っ伏し、俺は腹を抱えて笑い転げる。
「はははは弱え～」
「グルんなってイカサマしてねえ？」
「なめんなボケ、インチキせんでもお前ごとき圧勝やで」
「ざーこざーこ」
「今度雑魚って言ったらぶっとばすぞ！」
「じゃーこじゃーこちりめんじゃーこ」
鼻高々に踏ん反り返る茶倉の隣で囃し立てる。可哀想に、煽り耐性の低い板尾くんは真っ赤。
ビニールの帳越しに虫の声が聞こえてくる。スマホの時計を確めりゃ午後八時過ぎ、まだまだ宵の口。
拗ねてそっぽを向く板尾ににやけ、マイクに見立てた拳固を突き出す。
「罰ゲーム、黒歴史告白タ～イム。今度はどんな赤っ恥体験を披露してくれるんでしょうか」
板尾氏がどっかり胡坐をかき、シリアスな面持ちで深呼吸。
「学校前の坂の下にコンビニあんじゃん」
「バス停の向かい？」
「そこそこ」
「がどうした？」
一瞬だけ言い淀む。
「……トランプと間違えてコンドームの箱をレジに持ってった」

吹き出す。
「ははははは！」
「パッケのデザイン紛らわしいんだよ、しかも若い女の店員に当たっちまって」
「わはははははははははは！」
「笑うな！」
「うける～童貞まるだし～」
「お前よか先行ってるよ、元カノ持ちなめんな」
「トンネルの様子は？」
ツボにはまって爆笑する俺をスルーで茶倉が確認、ぶすくれた板尾が帳を捲る。
「異常なし。列車も来てねえ」
「空振りか」
「思ったんだけどさ、わざわざ泊まんなくてもいいんじゃね？」
「というと」
「こっそり家抜け出して、持ち回りで張り込むとか」
カードを切る手が止まる。何食わぬ顔でシャッフル再開。
「冴えてるじゃん板尾」
「ひょっとして今気付いた？」
「列車が来るタイミング読めねえし、一晩張り付いてた方が遭遇率上がるかな～って」
「行き当たりばったりやん」

ぐうのねもでねえ。地団駄踏んで開き直る。
「ダチとキャンプしたかったんだよ、今年の夏は親が忙しくて家族旅行の予定ねえし！」
「心霊スポットで？」
「住めば都っていうじゃん」
「骨埋める気なら止めへん」
「埋めたくはないです」
テントの底にのの字を書いていじける。板尾と茶倉が向ける同情の眼差しが物理的に痛てえ。
「どうりでノリノリのはずや」
「完食したくせに」
夕飯は既に終えた。俺が持ってきた携帯コンロを点け、飯盒で米を焚き、その上にレトルトカレーをぶっかけたのだ。ちなみに俺が飯盒、茶倉が蓋、板尾が紙皿で食器を代用。プラの使い捨てスプーンは人数分配った。火の始末を徹底し、ゴミをちゃんとお持ち帰りすりゃ文句は言われねーだろ。
気分を変えて仕切り直す。
「ババ抜き飽きたな～。次はなに、神経衰弱？」
「ポーカー」
「だからルール知らねえっての」
額を突き合わせああでもねえこうでもねえと話し合うあいだ、茶倉は猫だましを連発していた。
「取り逃がした」
「蚊？　好かれてんなー」

「叩いても叩いても密入国してくんねん、ドタバタ大騒ぎして蚊帳吊る意味あらへんかった」
「気分出るだろ」
「出してどないすんねんしょうもな」
「ノリ悪ィ」
「は？」
大袈裟に肩を竦める板尾に茶倉がガンをとばす。まずい。
「じゃんっ」
ご機嫌な効果音付きでリュックから取り出したるはLサイズの花火の詰め合わせ。茶倉は無表情。
「やるんか？　ここで？」
「〆に」
「本来の目的忘れとるやろ完全に」
「俺は付き合うぜ」
板尾がことさら明るく笑いウィンクをよこすのに拝み手で礼を述べ、善は急げと支度にとりかかる。
「火は？」
「親父の百円ライター借りてきた」
帳を跳ね上げるや涼しい夜気が身を包み、濃密な草の匂いが鼻を突く。周りに人家が見当たらねえってことは、通報や補導の心配しなくてすむ。
「さすがに真っ暗」
「すげー星が見える」

「このへん明かり少ねえもんな」
俺と板尾が天然の星空に感動する横で、茶倉は蚊を叩いて殺していた。
「はよ終わらそ」
「なんだかんだまざるんだ」
「ぼっちは嫌？」
「帰る」
「ごめん嘘嘘」
即座に回れ右する茶倉を二人がかりで引きずり戻し、ススキ花火にライターで着火。
「花火大会スタート！」
「イエーイ！」
板尾とホップステップハイタッチが開始の合図。オレンジの炎が先端に燃え移り、シューッと音たてて幾条もの光の筋が枝垂れる。

このあたりには戦後に植林された杉林が広がり、トンネルの裏は山に面していた。俺の家からは自転車飛ばして四十分、まあまあな距離。

夏草が茂る地面にはへこんだゴムボールや空き缶、菓子の袋や片っぽだけの長靴が転がってる。

ちょっと離れた所には運転席のドアが外れた軽トラが打ち捨てられていた。

お袋曰く、普段はホームレスさえ近付かない寂しい場所らしい。もっと上の世代は神隠しの迷信にびびっていた。

草っぱらに倒れた黄桃の空き缶を起こし、それをバケツ代わりにする。水は行きがけに公園に立ち寄り、ペットボトルに汲んできた。

「者ども刮目せよ、我こそ伝説の二刀流じゃっ！」

お調子者の板尾が両手に構えた花火を振り回す。テレビ番組なら「危険ですので絶対に真似してください」のテロップが流れる蛮行。

「必・殺、千手観音！」

俺たちにとって幸いだったのは、ここに口うるせえ大人がいないこと。万が一にも燃え移らねえように草が生えてねえ場所でやったし、風向きにも気を付けた。

「残像だっ！」

「風になれっ！」

両手の花火をぐるぐる回しながら板尾と追いかけっこ。白やオレンジの閃光が爆ぜ、火花散る弧を描く。ここがビーチで俺たちがイケメンとギャルだったらもっと絵になったかもしんねえ。

「茶倉もやれ、楽しいぞ！」

「後方傍観者ヅラすんなー」
キャッキャッウフフじゃれあって青春を満喫する俺たちをよそに、茶倉は居心地悪げに腕を組んでいた。
「花火やったことねえの？」
「ある。昔」
大阪にいた頃だろうな、とぴんときた。一緒に花火するようなダチがコイツにいるとは思えねえ。
「おどれら高二やろ、マッハで童心返りすぎや」
「花火にスリルとロマン感じねー大人になりたくねーの！」
「若さ故の反抗だ。てか烏丸～やってもやっても減らねえぞ」
「フンパツしてファミリーセット買っちまった」
「浮かれすぎ」
頭上には大小無数の星が瞬いてる。このへんは常夜灯も疎らで自然光を遮る建造物がない。念の為懐中電灯とランプを持ってきてよかった、さすが俺。
「持ち帰んのめんど。始末手伝え」
「しゃあないな」
花火を持ってない方の手でいそいそ招きゃ、茶倉が億劫そうに歩いてくる。
その手にでっかい線香みてえなスパーク花火を渡し、ライターで炙る。
すると先端から勢いよく光が噴き出し、名前どおり星屑がスパークした。
中心は眩い白、枝葉末節は金を鋳溶かしたような橙のグラデーションを描く火花が四方八方爆ぜ散る光景は、新たな銀河の誕生に立ち会ったみてえな気分の高揚をもたらす。

「熱っ！」
「よそ見しとると火傷すんで」
「先に言え」
俺と板尾はパーッと派手なのを好み、ススキ花火やスパーク花火でアクロバティックに遊ぶ。
四変色、二十変色の簾がパチパチ弾け、ナイアガラの滝さながらオーロラの瀑布を広げる。
火花に照り輝く顔は陰翳が際立ち、腐れ縁のダチが妙によそよそしく見え、ともすりゃ他人のような錯覚を引き起こすのが不思議だった。きっと夏宵の魔法。
花火をやってる最中も警戒は怠らねえ。幽霊列車が現れたらすぐ動けるように目を配り、異質な存在感を湛えたトンネルをチラ見する。
「列車事故が起きた現場で罰当たりかな」
「後の祭り。祟りが怖いなら持ってくんな」
「パーッと景気付けに……」
「家が恋しい？」
「びびり扱いすな」
煤け燻るスパーク花火を無造作に突っ込む。缶の水がジュッと蒸発。
「このへん全然灯ねえし、火種は余分に持ってた方が心強えじゃん」
「一応考えとるんやね」
「まあな」
花火を持参した目的は遊びのみならず、いざって時の武器にする為。悪霊はもちろん怖えが、山から下りてき

たクマや変質者とばったり遭遇、なんて事も絶対ないとは言いきれねえ。
「野犬は火と煙が苦手。よーく燻しときゃテントまわりに寄ってこねえ、序でに虫も追っ払える」
「誰に吹き込まれたん」
「じいちゃん」
「重症やな」
ススキ花火をサイリウムに見立て、オタ芸パフォーマンスで笑いをとる板尾。対抗心を刺激され、地面に投げ付けた爆竹を踏まねえように、でたらめなタップダンスを踊る。茶倉は空き缶の前にしゃがみ、長細い棒を灰に変えていく。
新たな一本を持って隣へ行き、囁く。
「八神のばあちゃん、まだ生きてんのかな」
それが最大の懸念。
「連れて帰るって約束しちまったけど、あの世行きの列車に乗ってるってことは」
「あの世行きとは決まっとらん」
「だって冥界トンネルなんだろ」
「噂には尾ひれが付くもん」
不安材料は他にもある。茶倉の隣に蹲り、先端から爆ぜ散る火花を見下ろす。
「葉月さんは？」
「ここで消えた確証ない。野崎が邪推しとるだけ」
一年前に更新停止した葉月さんのＳＮＳは、「死にたい」「しんどい」「消えたい」の鬱ツイートで埋め尽く

されていた。
「精神科通いしとったって話やし、現実嫌んなって失踪したんちゃうのん」
「じゃあさ、最新の投稿『さよならしなきゃ』はどー説明すんの」
「家族、友達、恋人。当ては腐るほど」
「主語を省いた理由は？　この世と縁を切るって解釈した方が自然じゃね？」
「構ってちゃんで死にたがりのメンヘラ女が、自分で列車に乗りこんだって言いたいんか」
「悪霊に魅入られた、とか」
俺の推理。葉月さんはサークル仲間と肝試しに訪れた際悪霊に憑かれ、トンネルに誘き出された。そこに列車が現れ、彼女をさらっていく。
「幽霊って霊感強いヤツに寄ってくんだろ、俺しかり」
大昔から相次ぐ神隠し。戦時中の列車襲撃事件。守屋のじいちゃんの妹を含む民間人の大量死と葉月さんの蒸発。
「繋がってんのかな。幽霊列車の正体は事故った列車の霊？」
「列車の霊て何やそれ」
「わかんねー。付喪神の一種？」
「アホくさ」
「ゲゲゲの鬼太郎にもあったじゃん、幽霊電車の回。知らね？」
「どんな話や」
「ネタバレしていいの？　傑作の呼び声高えしまだ見てねーなら」

「やっぱええ」
「ユーチューブに落ちてた」
「無断転載やん」
「見んの？　見ねえの？」
「見る」
好奇心に負けたらしい茶倉の前で液晶タップ、動画を再生しながら注釈を挟む。
「元ネタは鉄道が生まれた頃から語り継がれる怪談。これに乗っかると本来の行先とは別の場所に運ばれる、時刻表に載っていない電車。終電から始発まで、深夜帯を走行する回送電車をこうよぶことがあるらしい。大阪大空襲ん時にも目撃されたって、お前の地元じゃん」
「大阪いうても広いで」
茶倉にマウントとれる機会そうそうないんで、得意満面に付け足す。
「昭和二十年の大空襲ん時、難波や心斎橋周辺は火の海と化し、大勢の人たちが逃げ遅れた。そこで乗務員が機転を利かせ、地下鉄の入口を封鎖する鉄扉を開け、時間外に電車を出した」
「地下鉄で避難したんか」
「ファインプレーの勝利。幻扱いされちまったのは肝心の運転手が名乗りでねえせい。結局ヒーローは正体不明なまんま、生存者の投書でそういうことがあったってわかったんだ。よく似た都市伝説に幽霊バスってのもある」
「けったいな話やな、戦後すぐならいざ知らず定年後は内務規定違反に当たらんのに」
「面白えのは生存者の証言がまちまちな点。地下鉄の入口は閉まってた、いや開いてた、ホームは人でごった

返してた、がら空きだった……みーんな食い違ってんの。事実と言えんのはその電車が心斎橋から梅田まで走ったことだけ、当直の乗務員は一切の関与を否定してる」
「なるほど、幽霊が操縦したから幽霊電車」
「鬼太郎の話は現代風にアレンジされてる。車両は鬼太郎が生み出した幻、乗客は幽霊や妖怪。駅の名前は臨終駅、火葬場駅、骨壺駅……異界駅の派生みてーだな」
「態度のデカい酔っ払いが仕置きされるんか。皮肉利いとる」
どうやらお気に召したようだ。ちょっとした疑問を覚え、質問を重ねる。
「トンネルが心霊スポット化しやすい理由って」
「色々」
「たとえば」
「劣悪な労働環境や落盤事故による犠牲、瘴気が溜まりやすい半密閉構造、産道に似た形状が見せる胎内回帰の幻覚、岩盤の圧電効果が与える脳への影響」
「暗くて寒くてじめじめしてっからか」
「馬鹿でもわかるようにまとめてくれはるあたり地頭ええね」
そっけなくスマホを突っ返し、トンネル開口部に凝視を注ぐ。
「鉄道に纏わる怪談は明治の頃からあった。田舎の百姓は蒸気機関車を狸が化けた怪物て思い込んだ」
「しっぽ生えてんの？　やだ可愛い」
「死者を乗せて走る列車の話も怪談としちゃメジャーさかいに」
「入口見張っときゃわかるよな？」

「八神はトンネル内で追い付かれた、入ってくとこは見てへん」
「ってことは」
「『中』に直接降って沸いたんかも」
あんぐり口を開け、閉ざす。
「―テント、移動する？」

板尾が間の抜けたしゃっくりを上げる。手には開栓済みの缶ビール。
「おまっ、どっから」
「うち」
「ちゃっかり持参かよ」
「飲む？」
「遠慮しとく」
「ノリ悪」
「酒ははたちを過ぎてから。ゴミ持ち帰れよ」
「了解」
せっかくの夏休みだし、堅苦しいことは言わず話題を変える。
「本格的な花火って久しぶり。小坊の頃は近所のガキんちょどもで集まってやったんだけど」
「町内会の行事？」
「保護者の監督付き。中学ん時も一回やった、剣道部の合宿の夜」
「元剣道部だっけ」
「一応主将」
「なんで辞めちまったの。人間関係のごたごた？」
「色々あったんだよ。板尾は部活やんねーの、受験までまだ結構あんじゃん」
「だりいもん」
溌剌とした声が急に湿気る。

「夏んなったら海で花火しようって、リカと約束したんだ」
魚住リカは板尾の元カノ兼クラスメイト、俺と同中の女子。鳥葬の巫女の祟りを受け、去年の夏休み前に命を落としている。
「バイト代貯めて、泊まりで海行ってパーッと遊ぶ予定だった。叶えてやれなくて彼氏失格だよな」
「板尾……」
あれから一年、立ち直ったように見えたのは強がりだったのか。そりゃそうだ、あんな別れ方したら引きずるに決まってる。
「アイツは俺のせいで」
「それ禁止。吹っ切る……のは難しいだろうけど、そろそろ新しい恋にトライしてもいいんじゃね？　気になってる子いねえの」
魚住は一周忌を迎えた。葬式じゃ取り乱していた母親も徐々に回復し、現在は娘の死を受け止めている。
なのに元カレが未練を引きずってたんじゃ、アイツだって安心してあの世に行けねえ。
当の本人はセンチメンタルな気分に浸り、ぐびりとビールを飲む。
「こっちも頑張ってんだ、当たって砕ける覚悟であっちこっち合コン顔出したり。でもよ～ピンとこなくて」
「難しいな」
「烏丸、オンナ紹介してくんねえ？」
「は？」
「女友達いんだろ」
「クラスで喋る子はいるけど友達っていうほどじゃ……」

まずい風向き。ドギマギうろたえる俺の肩を掴み、ただならぬ気迫を込め問い質す。
「誰かいんだろ誰か、知ってんだぞ意外とモテるって」
「何それ知んねー」
「隣の席の女子が烏丸くんいいよねって噂してた」
「マジで？」
「落とし物のハンカチわざわざ届けてやったろ」
知らなかった、俺ってモテてたのか。クラスの女子には雑に扱われてんのに。
「茶倉とふたり揃ってると萌える～とか捗る～とか」
「方向性違くね？」
「なあ頼む一生のお願いだ、イケてる女の子紹介してくれ！　俺だって青春してえよ、けどリカよりイイ女なんかそーそーいねえし合コン行きまくってもさっぱりときめかねー！」
「さては泣き上戸だな」
まさかと思って辺りを見回しゃ草むらに累々と空き缶が転がっていた。飲みすぎ。
「しかたねえなあ」
回収中、俺が炙っていた地面の色が黒ずんでるのに気付いた。花火で焦げた……んじゃなく、土が掘り返された跡っぽい。
「クマ……じゃねえよな」
突如として板尾が号泣し始めた。
「リカあああああああああ、リカあああああああああ、なんでおいてったんだよおおおおおおおお」

「近い近い顔近い！　お前と魚住がラブラブだったのはよくわかったから一旦離れて」
「純愛だぞ‼」
「初エッチは？」
「夏休みに一線こえる計画だったんだよ‼」
「童貞かよ」
「うるせえ何か問題でも⁉　そーゆーお前は卒業したのかよ裏切り者、仲間だって信じてたのに！」
「あちちあぶねーから花火振り回すな、ゲンミツには童貞だけどヴァージンじゃねーっていうか助けろ茶倉！」
「手ェ離せへんねん」
「地面と睨めっこしてるだけじゃん！」
「ダンゴムシ直火焼きすんの忙しゅうて」
「鬼畜の所業かよ⁉」
「リカあああああ、リカあああああああああ」
さすがに気の毒になり、できるだけ優しい声で妥協案を述べる。
「えーと……ウチの姉貴でよけりゃ紹介するぜ」
「マジ？」
げんきんに泣き止む。
「姉ちゃん何歳？」
「大学一年。二個上」
「顔は？　美人？　可愛い？　おっぱいでっかい？　スリーサイズは」

「俺を女にした感じかな」
一瞬固まり、俺の顔をまじまじ見て検討しだす。
「イケっ……なくもねえのか？」
そこまで思い詰めてたのか。魚住亡き後合コンで空回りし続けたダチに同情し、一肌脱いでやる。
「練習台になってやっから口説いてみ」
「ここでか」
「カノジョ欲しくねえの」
「めちゃくちゃ欲しいっす」
「よし来い」
ちょこんと正座するなり飲み干した缶をぶん投げ、真剣極まる面構えで睨めっこ。
「……で、どうすんの？」
「褒めるんだよ」
「眉毛が凛々しい」
「ども」
「デコが広くてチャーミング」
「もっと言って」
「地声がでけ、肺活量すごくて待ち合わせん時助かる」
「言い直す意味あった？」
「顔がうるせえ」

「褒めてねえぞ板尾くん」
「カレーの具だって顔の部品だってでっけえ方がいいだろ」
「たしかにハンバーガー一口でいけっけど」
「さすがに二口やないと無理やろ」
「食べっぷりが良くて見てて気持ちいい」
「お代わりカモン」
「優しいよな。落ち込んでる時、ラーメン誘ってくれた」
「替え玉万歳」
「チャーシューくれた。感謝してる」
「どういたしまして」
お見合いみてえでむず痒い。鼻の下をこすって照れりゃ、板尾が奇声を上げジャンプ。
「すまん、手が滑った」
茶倉が板尾に花火を向けていた。良い子はまねしないでください。
「過失で済まされるレベルじゃねえぞ！」
「おみ足直火焼きされた位でキレんなや、両面炙ってチャーシューとお揃いにしたろか」
ぴょんぴょん跳ねる板尾の抗議を流し、地面に火花を注ぐ。
「茶倉～、ダンゴムシ焼くのやめてこっち来い」
「焼いとるんは餅だけ」
板尾と並んで首を傾げ、水を張った空き缶に燃え殻を突っ込む。

「〆はコレ」
花火大会も終盤にさしかかり、板尾が数メートル先に筒をセットし、ライターで着火する。
太筒から青い火が爆ぜ、一直線の軌道を描いて駆け上り、ダイナミックに花開く。
「た～まや～」
手庇で空を仰ぎ、やや小ぶりの打ち上げ花火に見とれる。右には冷めた様子の茶倉、左には子供っぽい笑顔の板尾。
集合場所があの世に直通と噂されるトンネルに面した草っぱらってのを差し引けば、気心知れたダチと遊びまくり、まんざら悪かねえ夏の思い出ができた。
ゴミの始末を終えテントに戻る際、茶倉が言った。
「ホンマお人好しやね。気晴らしさせたろ思て誘うたんやろ」
「何のことだか」
カノジョといちゃいちゃ相談し合って埋めた夏休みのスケジュールが悉くご破算になり、去年の板尾は塞ぎこんでいた。
冥界トンネルの調査に呼んだのは、この時期にぶり返す別れの痛みを馬鹿騒ぎでごまかす為でもある。
「……魚住の飛び下りにゃ俺も噛んでるし、責任感じるなって方が無理な相談」
「呆れた」

夜は交代で見張り番。最初は板尾、次が茶倉、最後が俺。順番はじゃんけんでフェアに決めた。どのみちテント内は雑魚寝にゃ狭いし、三人横たわりゃ満杯になる。

天井に張ったロープにランプを吊り、寝袋に潜って休む。帳の向こうからはうるさい位に虫の声が聞こえていた。

「キャンプみたいでワクワクしねえ？」

「はよ寝ろ。仮眠とらな後辛いで」

茶倉が寝袋にくるまり背中を向ける。頭上にはアラームをセットしたスマホが置いてある。

「板尾のヤツ大丈夫かな、結構飲んでたけど。間違えてテントん中に小便にしにきたりしねえよな」

「……ぐー」

「早っ」

もうちょっと構ってくれよと口を尖らすが、起こすのも気が引ける。仕方なく仰向け、ネットサーフィンで時間を潰す。冥界トンネルに来る前に可能な範囲で情報は集めてきたものの、完璧とは言えない。

「冥賀トンネルで検索してもヒット少ねえなあ」

むしろ悲劇的な鉄道事故として、戦中戦後史を扱ったサイトに取り上げられてる回数の方が多い。守屋のじいちゃんの話を思い出し、心ん中で手を合わせる。

「実際人も消えてんだよな……」

守屋のじいちゃんの妹は死んでる。野崎さんの友達と八神のばあちゃんは生死不明。前者に至っちゃ冥界トン

ネルで消えたかどうかもわからねえ、ただの憶測で妄想だ。片や八神はトンネル内で列車に乗った祖母を目撃している。
ゲゲゲの鬼太郎における幽霊電車のエピソードは、乗客全員が死人と妖怪だったってオチが付く。
八神のばあちゃんがあの世行きの列車に乗っちまったんなら、もう手遅れじゃねえのか。
窓から飛び下りるとか非常停止ボタン押すとかして途中下車できるもんなのか？
不安と疑問が綯い交ぜとなり、寝返りを打った拍子に閃き、オカ板まとめブログを呼び出す。
「あった、きさらぎ駅」
肘を立て上体を起こし、スマホ画面をスクロールしていく。
きさらぎ駅とは2ちゃんねるに投稿された実況形式の心霊体験で、スレ主の葉純と名乗る女性が、新浜松駅から乗りこんだ遠州鉄道の電車に違和感を覚えるところから始まる。
葉純が乗り込んだ電車は普段と違いなかなか停まらず、伊佐貫と彫られたトンネルを抜けたのち、草原の只中の無人駅に到着する。
その駅こそかの有名なきさらぎ駅。
プラットフォームに乗務員は不在、携帯は圏外。周囲には人家も見当たらず、困り果てた葉純は線路に飛び下り、歩いて帰ることにする。
すると鈴や太鼓の音が響き渡り、祭囃子に追い立てられるように逃げる途中、地元の人間が運転する車に拾ってもらえたそうなのだが……。
ヒッチハイク成功と入れ違いに書き込みは途切れ、葉純は消息を絶っている。
その七年後、都市伝説をまとめたブログのコメント欄に葉純を名乗る人物が現れる。曰く、七年ぶりに現実世

界に帰還を果たしたというのだ。
きさらぎ駅を端緒とする実在しない駅群はそのまんま異界駅と呼ばれている。
きさらぎ駅と並んで有名なやみ駅かたみ駅他、架空の駅ではあるが幽霊電車に登場した臨終駅・火葬場駅・骨壺駅もこれにあたるっぽい。

「列車の行き先がきさらぎ駅ってのは出来すぎかな」
茶倉の考察を聞いてみたい。が、寝ているので遠慮する。それにしても静かだ。
頭の後ろで手を組み、ランプが仄かに照らす天井を仰ぐ。
「くそ、全然寝れねえ」
原因はわかってる、距離が近すぎんのだ。すぐ横で眠る茶倉の甘やかな息遣い、シャツの襟刳りから惜しげもなく覗く華奢なうなじ、懐かねえ猫みてえに丸まった背中を意識しちまい、目と股間がギンギンになる。
規則正しい呼吸に合わせ上下する肩甲骨を睨み、片肘付いて乗り出す。
「んー……」
寝袋ん中でごそごそ動き、だしぬけにこっちを向く。不意打ちに心臓が止まる。
茶倉の寝顔は物凄くレアだ。除霊ん時は大抵俺が先にバテ、コイツは涼しい顔で身支度を整えてる。
「おーい……」
小声で呼びかける。反応なし。至近距離で寝顔を拝み、すっきり整った目鼻立ちに見とれる。もっと近く、さらに近くへ這いずり、かすかに開いた唇が紡ぐ吐息に唾を飲む。

完璧な弧を描く瞼。
黒く濃く長い睫毛。
クソ生意気な覚醒時との落差も手伝ってか、鋭く冴えた眼光や憎たらしい表情が引っ込んだ顔は川床に削られ丸くなったガラスに近く、あらゆる感情が濾過された透明感を帯びていた。

茶倉練を茶倉練足らしめる、傍若無人な虚勢が抜け落ちた素顔。
ランプの笠を捻って明かりを消したら最後、夏の宵に消えちまいそうに儚げで。

何だこの気持ち。むらむらする。茶倉の寝姿があんまりにも無防備で、日頃おちょくられてる仕返しをしたくなる。
きょろきょろ辺りを見回す。板尾は外で待機、テント内には俺と茶倉だけ。見咎められる心配ねえ。
寝袋のジッパーを下げて抜け出し、茶倉の胴を跨ぎ、慎重に顔を近付けていく。

『隣の席の女子が烏丸くんいいよねって噂してた』

一年前なら舞い上がってた。今はそんなに嬉しかねえ。この一年で俺を取り巻く環境は激変し、除霊の建前で茶倉とヤりまくるのが日常になっちまった。
霊姦体質に目覚め、心と体が変化した。
俺はケツを掘られる悦びに目覚め、体の隅々まですっかり開発され、オナニーの時も前だけじゃ足りずアナニー

にドハマりし、今だってコイツが隣にいるだけでむらむらが止まんねえ。

「なんで平気なのお前」

ドキドキしてんの俺だけ？　あんだけやっといて下心ねえの？

悪霊を剥いで瘴気を浄化するのが目的なら、前戯も後戯もすっとばしてただ突っこみゃいいじゃねえか。

苛立ちと劣情が絡まった衝動に駆り立てられ、右手に嵌めた数珠と寝顔を見比べ、薄い唇に唇を重ねる寸前―

「夜這いか」

「ッ!!」

してやったりと片目が開く。ふてぶてしい含み笑い。次の瞬間寝袋のジッパーが駆け下り、逆に押し倒されていた。

「鼻に蚊がとまってたから追っ払おうとしただけで断じて寝込みを襲ったりは」

「ぬかせキス泥棒」

「未遂！」

しまった。

慌てて口を塞ぐも既に遅し、あっさりマウントをとった茶倉が宣言する。

「子供だましの火遊びじゃ物足りんか」

「やめ、ッぁ」

ランプが揺れる。影が蠢く。俺の首筋を吸い立て、片手でシャツを捲り、痩せた下っ腹を撫で擦る。
「表に板尾がいんだぞ」
「吹っ掛けたんはそっちやで」
「さっさと下りろ、バレちまったら」
「声出さんとき」
どかそうと腕を突っ張りゃあっさり払われ、振り落としにかかりゃ急所をくすぐられ、絶体絶命のピンチに直面。下手に暴れりゃテントごと潰れちまうと危ぶみ、唇を噛んで耐える。
「我慢できん？」
「む～っ、ん゛～っ！」
俺の口を塞いで首をなめてくる。続いて乳首に移り、先っぽをいじくり回して唾液を捏ねる。
板尾にばれるかもしれねえ緊張が異常に興奮と感度を高め、股間が固さを増していく。
「ダチの寝顔オカズにヌいたんか、変態」
「してねえよンなこと」
「毎晩一人エッチしとるくせに」
声を潜めて囁き、ほんの僅か手をずらす。それに同じく小声で返し、熱く疼く素肌を這い回る手に呻く。
「ええで。付き合うたる」
「ッ、ふ、やめ、んん゛ッ」
よれたシャツが首元で丸まり、いやらしく尖った乳首が露出し、脇腹を汗が伝い落ちる。
「昔の人が大勢死んだ場所でさかるとか不謹慎だろ！」

「お祭り気分で花火持ち出したヤツに言われるとムカツクな」
「アレは板尾を元気付けようとしてだな」
「かさぶた剥がしとったやん」
「空回りは認めます」
ちょっとだけ落ち込む。しかしまあ、下半身の暴れん坊がおさまり付かねえ。生理現象のジレンマを見通し、ランプの灯を浴びた茶倉がにんまり笑む。
「テントん中でテント張っとる」
「だじゃれか」
「一発ヌかなすっきり寝れんやろ、手伝ったる」
「脱がねえの」
「蚊に食われとうないし」
「ずりーの」
「俺の肌は安うない」
忙しげに揺れるランプの下、ズボンのチャックを開けペニスを掴む。
「待てよ板尾が」
「トンネルの方におるさかい聞こえへんよ」
「だけど」
「ばれてもかまへん」
俺の脚をこじ開け、カウパーと唾をまぶした指で後孔をほぐす。

「噂んなったら」
「週一でヤッとるセフレってことが？」
「恥ずかしくねえのかよ」
「せやな、こっち目当てのお客がぎょうさん押しかけてくるかも」
「てめえ!!」
カッとして胸ぐらを掴む。温度差のある睨み合いを断ち切り、後孔に剛直が押し入ってきた。
「ッぐ、ぁっふ」
「よォ締まる。声聞かれるかもて興奮しとるん？」
「茶倉やめっ、ぁっぐ、ンっふ、ぁっは」
「暴れるな。テントの下敷きになりたいんか」
次第に声が潤んで抵抗が弱まっていく。気持ちよさに腰が上擦り、抽送に合わせて動く。
「っふ、んっぐ」
俺の腕を持って首に掛け、向かい合わせに起こす。いわゆる対面座位。突き上げの律動が速まり、腰が勝手に跳ね回る。
「奥まで届くやろ」
「んッ、んッ、んッ」
「コリコリの前立腺当たっとんの、ちゃんとわかるで。離さんように食い締めて体は正直やね」
羞恥と焦りで頭が沸騰する。どうかばれませんようにと祈る一方、俺の腰を支え貫く茶倉に抱き付き、無我夢中でケツを弾ませる。

「もっと奥、そこッすげっ、ぞくぞくしてァあっあ、熱いの止まんねッもっ出る、ィっちゃうっ」
頭が真っ白に爆ぜ、体内にぬるい粘液が射出される。同時に俺のペニスから粘っこい白濁が飛び散り、背中が大きく仰け反った。【続】